

刊行のことば

有終資料篇第四輯を刊行することになりました。高梁高校は平成七年度には高梁中学校創立百周年、順正女学校創立百十五年、高梁高校発足四十五周年を迎えます。これを機に創立記念特別事業を推進しており、有終資料篇の刊行は、この事業の一つに位置づけられております。これまでに平成二年第一輯「山田方谷と有終館」、平成三年第二輯「順正女学校」、平成四年第三輯「高梁中学校」を刊行してきました。第四輯「高梁高等学校資料総覧」は、これまで未発表であった資料を一括して紹介するものであります。

この第四輯で、有終資料篇の刊行は一応終了したことになります。こうした資料篇の刊行は学校だけではとうてい無理であり、同窓会の方々のご支援があってこそ成し遂げられるものであります。厚くお礼申し上げます。

どうかこの有終資料篇が、同窓生はじめ多くの方々に愛読されることを願って止みません。また、遺墨展等の機会に校宝をご覧いただけるとなおいり難いことであります。

刊行にあたって山陽印刷株式会社をはじめ、各方面から多大のご協力を戴きました。厚くお礼を申し上げます。

平成七年二月

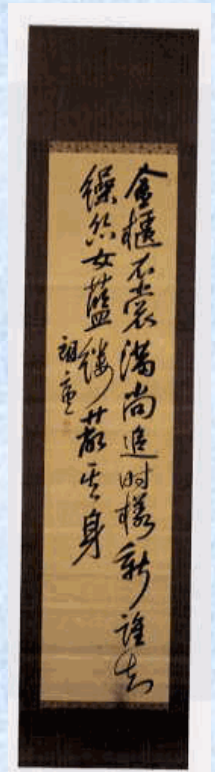
岡山県立高梁高等学校長

南 智



阪谷朗廬（さかたにろうろ）

漢学者。川上郡九名村（現小田郡美星町）に坂田良哉の三男として生まれる。通称素三郎のち希八郎、名は素、字を子絢、号は朗廬。六歳で父良哉に従って大坂に赴き奥野小山、大塩平八郎に学ぶ。十一歳で江戸に移り同郷の師昌谷精溪に入門、ついで十七歳で古賀トウ庵の塾「久敬舎」に入門した。二十六歳の時、母の病で帰宅する。嘉永四年（1851）、後月郡築瀬村櫻谷（現後月郡吉井町）に櫻溪塾を開く。嘉永六年郷校興讓館に招かれる。開国論を主張し、議会主義、海軍充実を説く開明派であった。明治元年（1868）広島藩の藩儒に迎えられ、さらに明治五年四月、陸軍省に勤める。以後文部、司法、大審院、内務省など要職を歴任。この間、福沢諭吉らの明六社に加わり、五十歳代で英・独語の勉強をし、世界共通語の必要を説いた。退官後、明治十二年東京学士会院議員に選ばれた。また講堂春崖学舎を開設したが、程なく没した。著書に「朗廬文鈔」「朗廬全集」「評註東萊博義」「田舎話」「日本地理書」「阪谷朗廬先生書翰集」などがある。



柚木玉邨（ゆのきぎょくそん）

文人画家。浅口郡玉島村（現倉敷市玉島）、柚木竹叟の三男。家は備中松山藩の吟味役をつとめ、奉行格の待遇を受けた。本名を方啓といい、通称梶雄。玉邨のほか瓊島仙客、雙壁斎主人、小鋤雲館主人などと号した。鎌田玄溪及びその子平山に学んだ後、東京帝国大学農学部に進学。明治二十三年（1890）同学を卒業後は、第八十六国立銀行取締役をつとめ、また岡山県農業会幹事兼技師の職をもち、農政の新知識として産業方面に残した功績は少なくない。南画を玉島に来ていた清国人胡鉄梅について学び、のちに宋・元の古法を研究、さらに書道・詩文に通達、流麗で品格の高い文人画をかいた。昭和二年（1927）日本書道振興会展に出品した「蕙蘭草蘭図」は日東賞第一席となる。泰東書道院審査員、平安書道会審査員、昭和十六年合同新聞社（山陽新聞社の前身）から文化賞を受ける。主著に「玉邨畫話」「品茶譜」「瓊島仙館畫存」「雙壁斎瑣談」などがある。また長男久太、孫祥吉郎は洋画をもって一家をなした。

